

嫌いな人物への対処行動とその後の感情の検討 —嫌悪人物との関わりの程度による相違—

山田 昂暉・森下 雄輔・谷口 淳一

問題

我々は生きていく中で様々な人に出会う。その中で好意を抱く相手と出会うこともあれば、嫌悪を感じる相手にも出会う。Rozin, Haidt, and McCauley (2008)は、嫌悪を誘発させる要因の1つとして、道徳的規範の違反を挙げている。一般的に感じられる嫌悪とは、この道徳的規範の違反に対する感情として経験されることが多く、「道徳的嫌悪」と呼ばれる。道徳的嫌悪は社会秩序を守るために機能している。そういった嫌悪を感じる相手と会社や学校など同じ集団に所属している場合、グループでの行動や会社での企画担当といった必然的に関わらなければならない場面が存在する。そういった場面に直面した際には、人は自己を守るため適切な対処をしなければならない。

このような嫌悪を感じる相手への対処法は現実において重要な事柄であるものの、それについて検討した研究は少ない。数少ない研究として、河野・羽成・伊藤(2015)や金山・山本(2005)が挙げられる。河野他(2015)は、河野・羽成・伊藤(2014)の研究から「他者から嫌われたくない」と考えている人は嫌悪を感じる相手に対して嫌いなそぶりを見せないように努めるといったように、対処に関する特定の傾向が生じる可能性を考慮している。その知見から嫌悪を感じる相手の特徴およびそのような人への対処との関連を調べている。その結果、自分と相違する相手、傲慢な相手、自己中心的な相手、主張過剰な相手は避けられ、妬みや自分と類似していることによって嫌悪を感じる相手に対しては融和的な対処がとられた。また、外見や話し方が嫌な相手は、非融和的な対処を引き起こす可能性が示唆された。さらに金山・山本(2005)は、自分の所属している集団内に嫌悪を感じる相手がいる場合の嫌悪者の行動を立場関係や所属意識と併せて検討している。その結果、組織に所属していて自分に不利益が生じるような場合には、立場関係に関わらず嫌悪を感じる相手に対して、関係改善行動が行われていたという報告がある。しかしこれらの対処は、嫌悪を感じる相手の特徴や原因によって析出されたものだが、その後の自身についての状態を見ていないので、適切であるかどうかは検討できていない。

齋藤(1986)は、嫌悪を感じる相手への対人行動によってどのような感情が生じるのかについて検討している。その結果、友好的行動や依存的行動を行う場合、人は嫌悪感や屈辱感などネガティブな感情を抱きやすかった。また、回避の行動や拒否的行動などのネガティブな行動を行う場合、嫌悪感、怒り、軽蔑感など外に向かうネガティブな感情

を抱きやすかった。つまり、嫌悪を感じる相手に対してはポジティブな行動を行ってもネガティブな行動を行ってもネガティブ感情を抱きやすいといえる。言い換えると、ポジティブにせよネガティブにせよ嫌悪を感じる相手に対して直接的に対処することは適切でなく、間接的で柔軟な対処をすることが望ましいと考えられる。

本研究では、嫌悪を感じる相手に対する直接的な対処、および間接的で柔軟な対処を区別して測定する指標として山崎(2013)の尺度を用いる。この尺度は、「嫌悪」ではないが、それと類似した感情である「苦手」に感じる相手への対処法を測定するものである。具体的には、「受容」、「回避」、「拒否」、「妥協」、「従属」、「主張」の6種類の対処法からなる。「受容」は苦手な人物のことを受容して関わろうとする、「妥協」は苦手な人物のことを妥協して、自分の苦手な気持ちを出さずに関わろうとする、「従属」は相手の立場が強く、相手に従って行動する対処である。また、「回避」は苦手な相手になるべく回避して最低限の関わりにとどめ、「拒否」は苦手な相手を拒否して関わらない対処であり、「主張」は苦手な相手に対して言いたいことは我慢せずに主張する対処である。山崎(2013)はこれらのうち、苦手な人物に自分の苦手な気持ちを示さない、柔軟なつきあい方である「受容」「妥協」「従属」と、苦手な人物に自分の苦手な気持ちを示す、直接的なつきあい方である「拒否」「回避」「主張」はそれぞれ相関が似た傾向を示すと述べている。本研究では、この山崎(2013)の対処行動の分類を用い、嫌悪を感じる相手に対して「拒否」「回避」「主張」といった直接的な対処行動を行うとネガティブ感情が高まり、「受容」「妥協」「従属」といった柔軟な対処行動を行うとネガティブ感情が低くなると予想する。

以上より、本研究の仮説は以下の通りである。

嫌悪を感じる相手に「拒否」「回避」「主張」という直接的な対処行動を行うほどネガティブ感情は高くなり、「受容」「妥協」「従属」という柔軟な対処行動を行うほどネガティブ感情が低くなるだろう。

ただし、このような傾向は嫌悪を感じる相手とどの程度関わらなければならないかによって異なる可能性がある。河野・羽成・伊藤(2016)は、嫌悪を感じる相手に対して援助が抑制されることを報告している。つまり、人は嫌悪を感じる相手にわざわざ関わることは少なく、関わらなくてもいいのに関わろうとすることによってネガティブな感情を抱く可能性が考えられる。本研究では、嫌悪を感じる相手と関わらなければならない程度が異なる3場面(1対1場面、グループ場

面, 関わらなくてもよい場面)を設定し, 嫌悪を感じる相手への対処行動とその後の感情との関連が場面によって異なるのかを探索的に検討する。

さらに本研究では, 嫌悪を感じる相手の特徴と対処行動との関連についても探索的に検討する。嫌悪を感じる相手の特徴として, 斎藤(2003)は「自分との相違による嫌悪」, 「相手への妬みによる嫌悪」, 「相手の傲慢さによる嫌悪」, 「相手の自己中心性による嫌悪」, 「相手の主張過剰による嫌悪」, 「自分との類似による嫌悪」, 「相手の外見による嫌悪」, 「相手の話し方による嫌悪」の8種類の特徴を見出している。「自分との相違による嫌悪」は態度, 考え方, 意見, 行動の仕方などにおいて自分とは異なっていると認知された他者に対する嫌悪であり, 「相手への妬みによる嫌悪」は自分よりも優れていたり, 自分にとってうらやましい面を持っている他者に対する嫌悪である。「相手の傲慢さによる嫌悪」は人を見下しているような人や, 自分の方が優れているという態度をとったりする人に対する嫌悪であり, 「相手の自己中心性による嫌悪」は人の迷惑を考えない人やずるいところがある人のように, 自己中心的な態度や行動をとる他者に対する嫌悪である。「相手の主張過剰による嫌悪」は外向的で思ったことをはっきり言う人や, 口調が強い人や自信に満ちている人などへの嫌悪であり, 「自分との類似による嫌悪」はネガティブに価値付けられる特性を持っている類似した他者に対する嫌悪である。「相手の外見による嫌悪」は他者の顔や表情, 体型などによって抱く嫌悪であり, 「相手の話し方による嫌悪」は相手の話し方や口調などによる嫌悪である。これら嫌悪を感じる相手の特徴の8因子と対処行動との関連を検討する。

方法

調査参加者

近畿圏内の大学に通う大学生を調査参加者とした。回答者は179名(男性54名, 女性123名, 無回答2名, 平均年齢 = 19.32, $SD = 1.33$)であった。

倫理的配慮

調査では, 調査への参加は任意であること, 不快な感情が生じた場合はいつでも回答を中止できること, 個人が特定されることはないことをあらかじめ伝えただけで, 研究参加に同意した参加者のみに調査を実施した。

質問紙の構成

質問紙はQuestantを用いて作成し, 遠隔授業を受講している大学生に対してWeb調査形式で実施した。

本研究で用いる質問紙は以下の項目で構成された。まず, フェイス項目として, 性別と年齢に回答を求めた。

嫌悪を感じる相手の特徴 まず, 「現在あるいは過去において嫌いだと感じた同性の特定の人」を1人思い浮かべてもらった。その人の特徴について, 斎藤(2003)が開発した対人的嫌悪感尺度に回答を求めた。この尺度は「自分と

の相違による嫌悪」「相手への妬みによる嫌悪」「相手の傲慢さによる嫌悪」「相手の自己中心性による嫌悪」「相手の主張過剰による嫌悪」「自分との類似による嫌悪」「相手の外見による嫌悪」「相手の話し方による嫌悪」の8因子から構成されており, 各因子から3項目ずつ, 合計24項目を使用した。「5. 非常によく当てはまる」「4. 当てはまる」「3. どちらともいえない」「2. 当てはまらない」「1. 全く当てはまらない」の5件法で回答を求めた。

嫌悪を感じる相手との接触場面の想起 次に, 上記で想起した嫌悪を感じる相手と接触する場面を想起してもらった。回答者には「1対1で関わらなければならない場面(1対1場面)」「グループになり関わらなければならない場面(グループ場面)」「一緒にいた場面(関わらなくてもよい場面)」のいずれか1つの場面に割り当てた。そして, それらの場面について, 自身が経験した具体的な状況を想起させ, それがどのような場面であったかを簡単に記述することを求めた。そのような場面に遭遇したことがない場合は, 遭遇したと仮定して回答させた。

対人嫌悪への対処行動 上記で想起した場面での嫌悪を感じる相手に対する対処行動を調べるために山岸(2013)が開発した対人苦手意識対処法尺度を用いた。この尺度は「受容」「回避」「拒否」「妥協」「従属」「主張」の6因子で構成されており, 各因子から3項目ずつ, 合計18項目を使用した。「5. 非常によく当てはまる」「4. 当てはまる」「3. どちらともいえない」「2. 当てはまらない」「1. 全く当てはまらない」の5件法で回答を求めた。

対処行動後の感情 想起した場面での対処行動後の感情を調べるために, 斎藤(1985)が開発した感情項目から, ポジティブな感情(嬉しさ, 喜びなど), ネガティブな感情(絶望, 憎悪など)と思われる各8項目, 合計16項目を抜粋して使用した。「4. はっきり感じた」「3. 少し感じた」「2. あまり感じていない」「1. 全く感じていない」の4件法で回答を求めた。

結果

HAD16.302(清水, 2016)を用いて因子分析, 分散分析, 相関分析を行った。

嫌悪を感じる相手の特徴の因子分析

嫌悪を感じる相手の特徴の24項目について, 探索的因子分析(最尤法, プロマックス回転)を行った。因子数は, 因子の解釈可能性を考慮して5因子とした。回転後の最終的な因子のパターンをTable 1に示した。斎藤(2003)と同様に, 第1因子は「相手の傲慢さによる嫌悪」, 第2因子は「相手の外見による嫌悪」, 第3因子が「自分との相違による嫌悪」, 第4因子が「自分との類似による嫌悪」因子と名付けた。第5因子については斎藤(2003)の「相手への妬みによる嫌悪」と「相手の主張過剰による嫌悪」とが統合された項目で構成されていたため, 「社会的望ましさによる嫌悪」因子と名付けた。各因子について負荷量の高い項目の平均

Table 1 嫌悪を感じる相手の特徴についての因子分析

	相手の傲慢さ による嫌悪	相手の外 見による 嫌悪	自分との 相違による 嫌悪	自分との 類似による 嫌悪	社会的望まし さによる嫌悪
Q8 攻撃的である	.80	.00	-.21	-.11	-.05
Q2 口調が強い	.75	-.03	.01	.09	-.33
Q1 人を見下しているようなかんじである	.75	.06	-.07	-.10	-.02
Q20 自己中心的である	.62	-.13	.13	.04	.21
Q16 気にさわることを言うてくる	.53	.01	.01	-.02	.06
Q12 周りの人に気を使わない	.52	.00	.09	-.04	.11
Q10 口調が嫌い	.48	.40	-.06	-.09	-.04
Q11 顔の表情が嫌い	.04	.85	-.05	-.10	-.06
Q15 顔が嫌い	-.03	.75	.06	.08	-.03
Q3 話し方が嫌い	.11	.55	.05	.03	.06
Q21 体型が嫌い	-.23	.40	.25	.23	.15
Q7 性格的に自分と異なっている	-.04	.05	.79	-.26	-.14
Q14 自分と考え方が違う	-.07	.05	.76	-.06	-.15
Q23 自分が理解できないことをする	.07	-.02	.58	-.02	.16
Q6 自分と似たような嫌な面を持っている	-.01	.05	-.23	.79	-.08
Q17 自分の嫌な面とその人の嫌な面が似ている	.06	.05	-.24	.73	-.01
Q13 集団の中でのキャラクターが自分と似ている	-.10	-.11	.06	.62	-.19
Q9 自分がいたいポジションにいる	-.06	.06	.06	.42	-.19
Q4 自分よりも優れている	.10	.02	.04	.20	-.67
Q18 思ったことをはっきり言う	.39	-.07	.31	.11	-.51
Q22 周囲からの評判がよい	-.21	-.01	.17	.29	-.48
Q5 自分のせいであることを人のせいにしてくる	.36	.00	.05	.07	.46
Q19 自制心がない	.34	-.03	.20	.18	.43
Q24 しつこい	.25	.04	.18	.17	.26
固有値	4.18	2.99	2.84	2.18	1.88
因子間相関					
相手の傲慢さによる嫌悪		.35	.33	.13	.20
相手の外見による嫌悪			.43	.23	.02
自分との相違による嫌悪				.06	.02
自分との類似による嫌悪					.14
社会的望ましさによる嫌悪					

値を算出し合成変数を作成した。また、得点の高い人ほど、嫌悪の度合いが高くなるように逆転項目の処理を行った。各因子の α 係数を求めたところ、相手の傲慢さによる嫌悪 = .82, 相手の外見による嫌悪 = .76, 自分との相違による嫌悪 = .75, 自分との類似による嫌悪 = .72, 社会的望ましさによる嫌悪 = .62だった。

各因子の平均値と標準偏差を求めたところ、相手の傲慢さによる嫌悪 = 4.02 ($SD = 0.76$), 相手の外見による嫌悪 = 2.98 ($SD = 1.00$), 自分との相違による嫌悪 = 3.78 ($SD = 0.95$), 自分との類似による嫌悪 = 2.31 ($SD = 0.89$), 社会的望ましさによる嫌悪 = 2.78 ($SD = 0.77$)だった。

嫌悪を感じる相手への対処行動の因子分析

嫌悪を感じる相手への対処行動の18項目について、探索的因子分析(最尤法, プロマックス回転)を行った。因子数は、因子の解釈可能性を考慮して4因子とした。回転後の最終的な因子のパターンをTable 2に示した。山崎(2013)と同様に、第1因子は「妥協」、第2因子が「拒否」、第3因子が「従属」、第4因子が「主張」の4因子が抽出された。各因子について負荷量の高い項目の平均値を算出し合成変数を作成した。また、得点の高い人ほど、その対処行動を

より行っていることを表すように逆転項目の処理を行った。各因子の α 係数を求めたところ、妥協 = .71, 拒否 = .74, 従属 = .74, 主張 = .81だった。

嫌悪を感じる相手への対処行動後の感情の因子分析

嫌悪を感じる相手への対処行動後の感情についての16項目について、探索的因子分析(最尤法, プロマックス回転)を行った。因子数は、因子の解釈可能性を考慮して2因子とした。回転後の最終的な因子のパターンをTable 3に示した。齋藤(1985)が大別した「ポジティブ感情」と「ネガティブ感情」が抽出された。各因子について負荷量の高い項目の平均値を算出し合成変数を作成した。また、得点の高い人ほど、感情の度合いが高くなるように逆転項目の処理を行った。各因子の α 係数を求めたところ、ポジティブ感情 = .86, ネガティブ感情 = .79だった。

嫌悪を感じる相手の特徴と対処行動との関連

まず、探索的な検討として、嫌悪を感じる相手の特徴と対処行動の関連を調べるために相関分析を行った(Table 4)。その結果、「相手の傲慢さによる嫌悪」は、「主張」と有意な正の相関を示していた。また、「相手の外見による嫌悪」

Table 2 嫌悪を感じる相手への対処行動についての因子分析

	妥協	拒否	従属	主張
Q10 表面的なつきあいにとどめた	.86	.21	-.16	.16
Q18 相手の嫌な面を我慢した	.53	-.08	.12	.03
Q17 当たり障りのないようにつきあった	.51	.05	.12	-.23
Q11 気持ちを落ち着かせた	.49	-.02	.17	.03
Q12 相手はこういう人なんだと自分に言い聞かせた	.35	-.08	.23	-.05
Q8 相手の嫌なところをなるべく気にしないでつきあった	.33	-.23	.13	.13
Q13 目を合わせなかった	.06	.70	.03	-.03
Q4 なるべく関わらないようにした	.27	.66	-.09	-.04
Q1 けんおをかんじる	-.27	.66	.15	.13
Q15 苦手と感じていることに気づかせるようにした	-.25	.62	.16	.18
Q6 相手に認められるように努力した	-.09	-.03	.81	-.08
Q7 その人の気分を見ながら慎重に行動した	.25	.09	.63	.01
Q14 相手の言いなりになった	.12	.23	.59	-.13
Q3 相手を理解しようと努力した	.01	-.19	.49	.07
Q5 自分から話すようにした	-.02	-.37	.37	.26
Q16 言うべきことをいった	.02	-.14	-.09	.87
Q9 度が過ぎれば、はっきりと言った	.16	.09	-.03	.84
Q2 相手のマイナス面を注意した	-.09	.11	.01	.66
固有値	2.69	2.64	2.60	2.45
因子間相関				
妥協		-.30	.19	-.35
拒否			-.37	-.02
従属				.30
主張				

Table 3 対処行動後の感情についての因子分析

	ポジティブ感情	ネガティブ感情
Q14 嬉しさ	.82	-.11
Q12 喜び	.78	-.07
Q2 満足感	.72	-.11
Q15 愛情	.66	.04
Q1 好感	.64	.06
Q7 安心	.62	-.15
Q5 敬意	.56	.15
Q9 優越感	.51	.10
Q13 絶望	-.10	.68
Q8 憎悪	-.05	.64
Q16 嫌悪	-.13	.62
Q6 苦悩	.01	.60
Q11 イライラ	-.15	.57
Q3 悲しみ	.22	.53
Q10 劣等感	.29	.48
Q4 嫉妬	.36	.41
固有値	3.92	2.72
因子間相関		
ポジティブ感情		-.02
ネガティブ感情		

は、「拒否」と有意な正の相関を示した。次に、「自分との相違による嫌悪」は、「拒否」と有意な正の相関を示した。「自分との類似による嫌悪」については、「従属」と有意な正の相関を示した。そして、「社会的望ましさによる嫌悪」は、「従属」と有意な正の相関を示した。以上より、嫌悪を感じる相手の特徴によって用いられる対処行動は異なることが示唆された。

嫌悪を感じる相手への対処行動の場面間の相違

各場面での嫌悪を感じる相手への対処行動「拒否」「主張」「妥協」「従属」の平均値と標準偏差をTable 5に示した。各対処行動が場面間で異なるのかを調べるために、対処行動ごとに対応のない2要因分散分析を行った。その結果、「主張」にのみで場面の有意な主効果が認められた($F(2, 176) = 4.77, p < .01$)。多重比較(Holm法)を行った結果、グループ場面において、関わらなくてもよい場面よりも「主張」の対処行動がとられることが示された。

「妥協」「拒否」「従属」では場面の有意な主効果は認められなかった。

場面ごとの嫌悪を感じる相手への対処行動とその後の感情との関連

場面ごとに嫌悪を感じる相手への対処行動とその後の感情の関連を調べるために相関分析を行った(Table 6)。

嫌悪を感じる相手と1対1で関わらなければならない場面 嫌悪対象者と1対1で関わらなければならない場面での対処行動の各因子とその後の感情の各因子との相関関係については、「妥協」が、「ネガティブ感情」と有意な負の相関を示していた。そして、「従属」は、「ポジティブ感情」と有意な正の相関を示していた。「拒否」と「主張」はいずれの感情とも有意な相関を示していなかった。

嫌悪を感じる相手とグループになり関わらなければならない場面 嫌悪を感じる相手とグループになり関わらなければならない場面での対処行動の各因子とその後の感情の

Table 4 嫌悪を感じる相手の特徴と対処行動の相関関係

	妥協	従属	拒否	主張
相手の傲慢さ	-.10	-.01	.12	.37 **
相手の外見	.05	-.02	.33 **	.11
自分との相違	.02	-.06	.19 *	-.07
自分との類似	.12	.21 **	.13 +	-.07
社会的望ましさ	-.05	.19 *	-.04	.04

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

Table 5 嫌悪を感じる相手への対処行動の場面ごとの平均値と標準偏差

	1対1場面	グループ場面	関わらなくてもよい場面	F
妥協	2.32 (0.94)	2.42 (0.98)	2.55 (1.18)	0.70
従属	2.80 (0.78)	2.57 (0.92)	2.43 (0.87)	2.79 +
拒否	2.95 (0.90)	3.25 (1.01)	3.31 (0.94)	2.51 +
主張	3.85 (0.70)	4.05 (0.67)	3.64 (0.81)	4.77 **

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

Table 6 場面ごとの嫌悪を感じる相手への対処行動と感情の相関関係

	ポジティブ感情	ネガティブ感情
妥協	.16 .49 ** .46 **	-.28 * .12 .18
従属	.32 * .31 * .30 *	.21 .31 * .37 **
拒否	-.20 .12 .19	.17 .15 .01
主張	-.02 .00 -.14	.19 .07 .18

** $p < .01$, * $p < .05$

注) 上段に「1対1場面」、中段に「グループ場面」、下段に「関わらなくてもよい場面」の結果を示した。

各因子との相関関係については、「妥協」が、「ポジティブ感情」と有意な正の相関を示していた。そして、「従属」は、「ポジティブ感情」と「ネガティブ感情」ともに有意な正の相関を示していた。「拒否」と「主張」はいずれの感情とも有意な相関を示していなかった。

嫌悪を感じる相手と関わらなくてもよい場面 嫌悪を感じ

る相手と関わらなくてもよい場面での対処行動の各因子とその後の感情の各因子との相関関係については、「妥協」が、「ポジティブ感情」と有意な正の相関を示していた。そして、「従属」は、「ポジティブ感情」と「ネガティブ感情」ともに有意な正の相関を示していた。「拒否」と「主張」はいずれの感情とも有意な相関を示していなかった。

考察

本研究では、関わらなければならない場面、関わらなくてもよい場面での対処行動とその後の感情との関連を検討することで、嫌悪を感じる相手に対する適切な行動を明らかにすることを目的とした。さらに、嫌悪を感じる相手の特徴と対処行動の関連を探索的に検討した。

はじめに因子分析によって、嫌悪を感じる相手の特徴について「相手の傲慢さによる嫌悪」「相手の外見による嫌悪」「自分との相違による嫌悪」「自分との類似による嫌悪」「社会的望ましさによる嫌悪」の5つの因子が抽出された。嫌悪を感じる相手への対処行動については、直接的な対処行動である「拒否」「主張」、柔軟な対処行動である「妥協」「従属」の4つの因子が抽出された。対処行動後の感情については「ポジティブ感情」「ネガティブ感情」の2つの因子が抽出された。

次に、嫌悪を感じる相手の特徴と対処行動の関連を検討するために、嫌悪を感じる相手の特徴の各因子と対処行動の各因子との相関を求めた。その結果、「相手の傲慢さによる嫌悪」は、「主張」と有意な正の相関を示していた。つまり

嫌悪を感じる相手として傲慢な人を想起した人には主張する対処を取る人が多く、傲慢でない人を想起した人には主張する対処を取る人が少ないといえる。斎藤(2003)は、「相手の傲慢さによる嫌悪」は人を見下して優位に立とうとする高圧的な態度をとる他者への嫌悪であると述べている。このことから、自分より優位に立たれたくない相手に対して「相手の傲慢さによる嫌悪」を感じると考えられる。金山・山本(2005)は自分より立場が下の相手に対して、相手に改善するように直接言うといった「積極解決」が行われるという報告があり、本研究の結果はこれと一致する。

「相手の外見による嫌悪」と「自分との相違による嫌悪」は、「拒否」と有意な正の相関を示していた。河野他(2015)でも、外面的な特徴は非融和的な対処を引き起こすと報告しており、本研究の結果はこれと一致する。「自分との相違による嫌悪」は、自分と性格や考えが違ってくると、今後互いに衝突し、周りを巻き込む可能性が高いためつきあわず避けるといった対処をする可能性が考えられる。

「自分との類似による嫌悪」と「社会的望ましさによる嫌悪」は、「従属」と有意な正の相関を示していた。「自分との類似による嫌悪」については、嫌いな相手であっても自身と似た要素を含んでいると相対的に受け入れやすく、結果として相手に従う対処をするのかもしれない。「社会的望ましさによる嫌悪」は、斎藤(2003)の「相手への妬みによる嫌悪」に加えて「相手の主張過剰による嫌悪」の項目も含まれており、社会的に望ましい行動をするがゆえに、嫉妬している相手に対する嫌悪である。このような相手は、自身より優れている部分があるため、今後何らかのメリットが生じる可能性を考慮し、相手に従属する対処をとるのではないかと考えられる。

次に、場面ごとの対処行動の違いについて分散分析を行ったところ、主張に対する場面の有意な主効果が見られ、関わらなくてもよい場面よりもグループ場面のほうが「主張」の対処行動がとられることが示された。グループ場面の場合、嫌悪を感じる相手に自身の意見や考えを主張することで、周りの他者からの同意を得なければならない可能性があるため、関わらなくてもよい場面より主張の対処がとられたのではないかと考えられる。

次に、嫌悪を感じる相手への対処行動とその後の感情の関連について相関分析を行った。その結果、まず直接的な対処行動である「拒否」「主張」はどの場面でも「ネガティブ感情」と有意な相関はみられなかった。次に、柔軟な対処行動である「妥協」「従属」については、1対1場面で「妥協」が「ネガティブ感情」と有意な負の相関を示していたが、他の場面では有意な相関はみられなかった。さらに、「従属」はグループ場面と関わらなくてもよい場面で「ネガティブ感情」と有意な正の相関がみられた。このことから仮説は支持されなかった。柔軟な対処を行うことはネガティブ感情を低めることもあるが、高めることもあることが示された。

まず、「表面的なつきあいにとどめた」などの「妥協」という柔軟な対処をすることは1対1場面ではネガティブ感情を低める結果となった。1対1という相手と関わらざるを得ない場面では、無用な対立を避けることで、ネガティブ感情を抑制することができ、「妥協」は適切な対処行動といえるだろう。また、グループ場面と関わらなくてもよい場面では「妥協」という相手と深くかかわらない対処をすることで、ポジティブ感情を低下させずにすんだと考えられる。

一方で、「相手に認められるように努力した」といった「従属」の対処をすることは、仮説に反し、グループ場面と関わらなくてもよい場面でネガティブ感情を高める結果となった。ただし、すべての場面で従属の対処をするほどポジティブ感情は高かった。他者に対する苦手意識を解消する方略とその後の状態について阿多・堀井(2019)は、苦手な人物に対する苦手意識を解消する方略の違いによって、その後の状態が変化するかについて検討を行っている。その結果、相手と関わりを持つ「接近方略」を行うことで互いの関係が改善された状態である「関係改善状態」につながり、「関係改善状態」は相手の性格や特徴を受け入れる状態である「受容状態」につながることを報告している。苦手な相手とは異なり、嫌悪を感じる相手に「接近方略」のような直接的な対処を行うことは、相手との関係が改善するかもしれないが、相手との軋轢が生じ、自らの感情状態が悪化する可能性がある。「従属」は相手と関わろうとする対処であるものの、相手に従う行動であるため、相手との軋轢が生じる可能性は低く、ポジティブ感情と関連がみられたと考えられる。一方、グループ場面や関わらなくてもよい場面では、「従属」の対処をとるとネガティブな感情を抱いていた。藤平・城(2014)は嫌悪を感じる相手に、相手の気持ちを探し、それにそうように振る舞うといった「取り入り」を行うことと、ストレス反応とが結びついていたと報告している。1対1の場面に比べてグループ場面や関わらなくてもよい場面は、嫌悪を感じる相手と無理に関わらなくてもよい場面である。それにもかかわらず、従属という相手に好意的な対処をすることは、嫌悪という自らの感情と矛盾し、認知的不協和を引き起こすと考えられる。そのため、ネガティブな感情も抱いたのではないかと考えられる。

本研究で想起させた場面には嫌悪を感じる相手がどのような行動を起こしていたかという情報は含まれていなかった。ただし、調査参加者は嫌悪を感じる相手が何らかの行動を起こしており、自身がそれに対応しなければならないという場面を想起したのではないかと考えられる。よって、「妥協」や「従属」といった柔軟な対処は嫌悪を感じる相手との衝突を避け、自身のストレスもためないため、ネガティブな感情は低める効果は認められないが、ポジティブな感情を高める結果になったのではないかと考える。

本研究の問題点の1つとして、嫌悪を感じる相手を1人しか思い浮かべてもらわなかったことが挙げられる。そのため、

嫌悪を感じる相手の特徴と対処行動との関連については個人間相関関係しか検討できなかった。今後は嫌悪を感じる相手を複数人思い浮かべてもらうなどの方法を用いることで個人内相関関係を検討していく必要がある。さらに、本研究では嫌悪を感じる相手がどのような行動をしていたのか、また、その人への対処行動を受けて嫌悪を感じる相手がどのように対応したのかについては場面想定に含めていなかった。また、嫌悪を感じる相手との立場関係についても場面想定に記述していなかった。実際は、これらのことが嫌悪を感じる相手への対処行動やその後の感情に影響を及ぼす可能性が高く、今後はこれらの要因を含めて検討を行う必要があるだろう。

引用文献

- 阿多 彩美・堀井 俊章 (2019). 大学生における対人苦手意識の解消方略と解消状態の関係 横浜国立大学教育学部紀要, 2, 152-160.
- 藤平 亜耶・城 佳子 (2014). パーソナリティ特性と対人ストレスコーピングスタイルがストレス反応に及ぼす影響—苦手な他者と嫌いな他者の違いから— 生活科学研究, 36, 93-105.
- 金山 富貴子・山本 真理子 (2005). 所属集団内の対人嫌悪事態における嫌悪者の行動 筑波大学心理学研究, 30, 13-24.
- 河野 和明・羽成 隆司・伊藤 君男 (2014). 他者から嫌われることを避ける傾向の個人差 東海学園大学研究紀要, 19, 155-165.
- 河野 和明・羽成 隆司・伊藤 君男 (2015). 対人嫌悪の理由と対処の関係—被嫌悪回避傾向を考慮— 東海学園大学研究紀要, 20, 127-137.
- 河野 和明・羽成 隆司・伊藤 君男 (2016). 嫌悪対象者に対する援助傾向—援助を抑制する特徴は何か— 東海学園大学研究紀要, 21, 123-129.
- Rozin, P., Haidt, J., & McCauley, C. R. (2008). Disgust. In M. Lewis, J. M. Haviland, & L. F. Barrett (Eds.), *Handbook of emotion* (3rd ed.) (pp. 757-776). New York: Guilford.
- 斎藤 明子 (2003). 対人的嫌悪感情に対する社会心理学的研究 九州大学心理学研究, 4, 187-194.
- 齋藤 勇 (1985). 対人感情と情緒の人間関係的アプローチ 心理学研究, 56, 222-228.
- 齋藤 勇 (1986). 対人感情と対人行動と情緒の関連 心理学研究, 57, 242-245.
- 清水 裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD —機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案— メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- 山崎 千尋 (2013). 対人関係で生起する苦手意識への対処の分類—大学生を対象とした研究— 北星学園大学大学院社会福祉学研究科 北星学園大学大学院論集, 16, 137-148.

Study of Coping Behavior and Subsequent Feelings Toward the Disliked Person : Differences According to the Degree of Involvement With the Dislikeable Person

Koki YAMADA, Yusuke MORISHITA and Junichi TANIGUCHI

Abstract

The present study examined the relationship between coping behavior toward a disliked person and subsequent emotions. We tested the hypothesis that direct coping behavior toward the disliked person would increase negative emotions, and flexible coping behavior would decrease negative emotions. A questionnaire survey was administered to college students (N=179, 54 males, 123 females, and 2 non-respondents). Results indicated that compromise, one of the flexible coping behaviors in situations where one has to relate individually, lowers negative emotions. However, subordination, another flexible coping behavior, was shown to increase negative emotions in situations in which one has to interact with the disliked person in a group and in situations in which one does not have to interact with the person. Flexible coping is an appropriate coping behavior because it can suppress negative emotions at least in situations where one has to relate individually.

Key word: disliked person, coping behavior, emotions